上

箱根の坂

司馬遼太郎

箱根の坂

（上）

司馬遼太郎

講談社

箱根の坂　上

昭和五十九年四月二十日　第一刷発行

定価　千二百円

著　者　司馬遼太郎

発行者　加藤勝久

発行所　株式会社　講談社

〒一一二　東京都文京区音羽二―一二―二一
振替東京八―三九三〇
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)

印刷所　豊国印刷株式会社

製　本　大製株式会社

© 司馬遼太郎　一九八四年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替え致します。

ISBN4-06-201131-X（0）　(文二)

講談社の文芸図書

〈値段の表示はすべて定価です〉

大坂侍
司馬遼太郎

江戸幕府崩壊を前に、半ば町人化した大坂の直参武士が最後に見せた意地とその顛末の悲喜劇を描く表題作他「和州長者」「難波村の仇討」等、司馬文学の絶品六編。　九八〇円

伊賀の四鬼
司馬遼太郎

織田信長が本能寺の変で討たれた後、天下に野心をもつ秀吉方の伊賀者と、柴田方の忍者との壮烈な戦いを描く表題作ほか「伊賀者」「下請忍者」など八編を収録。　一〇〇〇円

美濃浪人
司馬遼太郎

幕末騒乱の中、国事奔走の夢破れ、歴史に埋もれた無名の志士の悲哀を描く表題作ほか、「天明の絵師」「蘆雪を殺す」「喧嘩草雲」など歴史小説の佳篇を七篇。　一〇〇〇円

対談日本歴史を点検する
海音寺潮五郎
司馬遼太郎

歴史小説の二巨匠が、独自の見解や批評を加えながら日本人とその歴史を談じ、人物を評価し、日本人とは何か、を探って、今後あるべき姿勢を示唆した画期的対談。　八八〇円

風よ雲よ (上)(下)
陳舜臣

東に虎視眈々機を窺う満州族、西に流賊李自成軍団の黄塵が舞う――明朝崩壊のさなか、南に覇を唱え動乱期を生きる鄭成功の父鄭芝竜を描く長編歴史ロマン。　各一二〇〇円

太平天国 (一)～(四)
陳舜臣

一八五〇年、広西省で洪秀全らが組織した上帝会は、生活に苦しむ人々を結集し、清朝打倒に立ち上がる。太平天国、十五年の興亡を描く大長篇ロマン。　各一二〇〇円

講談社の文芸図書

梟の城　司馬遼太郎

殺戮を恣ままにした権力への復讐めざして、忍者葛籠重蔵は京に潜入し、伊賀者の怨みをこめて太閤秀吉の命をつけ狙う。闇は梟の天地だ、うごめく忍者群の暗闘は!? 一一〇〇円

尻啖え孫市　司馬遼太郎

織田信長の天下布武に徹底的に抗戦する紀州雑賀党の鉄砲勢三千！　率いるは桁はずれの奇矯児、鉄砲名人雑賀孫市――明るく大らかに戦国を吹き抜ける無頼の風は？ 一一〇〇円

北斗の人　司馬遼太郎

おのれの剣が制するか、他流が勝るか。あえて師の破門を受け、自ら編み出した六十八手の剣技！　幕末を風靡した剣の革命児、北辰一刀流は千葉周作の怒濤の生涯。　七八〇円

俄――浪華遊侠伝――　司馬遼太郎

天性の糞度胸と不敵な才智。幼くして賭場を荒し、長じて浪華一の大親分となる。権力に屈せず、庶民のため米相場を叩き、維新の戦火から大坂を護った明石屋万吉。 一二〇〇円

妖怪　司馬遼太郎

権謀渦巻く足利義政将軍の世である。将軍になろう、と途方もない夢を抱いて京に上った男がある。前将軍の落胤と称する熊野の源四郎だ。都に単食う妖怪との対決。 一〇〇〇円

歳月　司馬遼太郎

赤貧より出でて維新に功あり参議司法卿に栄達した江藤新平が、薩長閥を憎み近代国家日本を築こうと闘争に執念を燃やすが、遂に大久保に斃される迄の悲劇的生涯。 一一〇〇円

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

初出

読売新聞／昭和57年6月15日より昭和58年12月9日まで五三二回にわたって連載

目

次

若厄介　七
京　三八
伊勢殿　六一
新九郎　八一
千萱　一〇六
駿河舞　一四

骨川道賢　一六九
一夜念仏　二〇五
兵火　二三九
出奔　二四九
早雲　二六四
急転　二九三

装幀／井上正篤
資料／京洛月次風俗図扇流
（京都・光円寺蔵）
地図／村上豊

箱根の坂
(上)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

比叡山
銀閣寺
大
金閣寺
御所
大
野辺
東福寺
稲荷山
鴨川
桃山
東寺
桂川
伏見
宇治川
郷
宇治院
田原

若厄介

このあたりでは山中小次郎のことを、たれもそのようにはよばない。

「山中の若厄介」

とよんでいる。

小次郎は、山中家の世嗣ではない。次男であるがために生れつき「厄介」の烙印を背に捺されている。

兄の名は――名などどうでもよいが――山中主計盛義というたいそうな名乗りである。が、ありようは農民とかわらなかった。山民ともいえる。

この山村にひとすじの渓流が流れている。末の流れは野へ出て宇治川になり、京の南郊をうるおすというが、川の名さえない。細流ながら、おそろしいばかりの水の勢いで、山襞の岩の根を削るようにして川音をたてている。

その細流の片側が山壁の岩肌で、人は近寄れない。他の片側にはところどころ狭い平場が点在していて、水田がつくられている。田というより、城のような造営物で、田の一枚一枚が川原か

らそそり立ち、野面積でもって石垣が築かれている。
その高田へ水を汲みあげ、先祖代々、泥の面をはいまわって、わずかばかりの米をつくってきた。

をこづくまいぞ　田原の野には
奥の奥にも米がなる

「山の中とてをこづくまいぞ（ばかにすまいぞ）」
と、感情をこめて、この集落の娘たちが田植えのときにうたうのである。
自前の田で米をつくるほどの家なら、腹巻、長柄などを持ち、いざとなれば一郷のために合戦にも出る。この時代、農民と武士は、まだ分離していない。
村の差別の基準は、米にある。畑百姓も、きこりや鍛冶なども、米作をしないという一事だけで、一段下に見られる。
「厄介」たるものは、他家に養子の口でもないかぎり、なにかをせねばならなかった。山の中にあらたに畑を拓くか、手に職をつけて鍛冶や塗師になるか、あるいは京に出、当節流行の足軽というものになるか。
小次郎は、二十二にもなるのにいずれとも身の振りを決めずに兄の主計の厄介になっていた。自然、「若厄介」には、軽侮をこめられている。

「若厄介」の山中小次郎は、この朝、集落の上にのしかかるようにして竹木を茂らせている山壁を尾根にむかってよじのぼった。

ときに、応仁元年春である。

この時代、地球の他の地域でも、人類は多忙な世紀を迎えている。

ヨーロッパでは、イタリアを中心に、貨幣と商品と広域交易が社会をたえまなく沸きたたせる時代になった。神や迷信の支配力が薄れ、たとえばイタリアにおける複式簿記の考案ひとつでもわかるように、自他の存在を貨幣という数量で見きわめるようになった。諸要因がかさなって合理主義の精神がうまれ、かつ人間のありのままを直視しようとする欲求も社会にみちあふれるようになっている。絵画や彫刻が写実的になり、ひとびとは古代、人間が太陽の下でかがやいていたことを思い出そうとし、それを芸術の分野で再生させたりした。

中国でも、南宋から元の時代が、乱世ながら、商業が活性化し、あわせて庶民文化が飛躍的に向上した。あわせて学芸もさかんになり、かつ政治が、経済社会という奔馬を統御する上で、困難になった。そのあとをうけた明朝が、海禁（一種の鎖国）で世の中を締めつけようとしつつも、世の沸騰する力をおさえつけきれずにいる。

室町将軍の治下の日本でも、おなじような現象が、はじまっていた。鎌倉期に成立した武家体制はもはや古典化し、室町幕府は世間の煮えたぎりに翻弄されているといっていい。

幕府は、無能そのものの政権だった。たとえば、この乱世を、年号を改めることで鎮めようとした。

去年、改元されて文正元年になったというのに、ことしの春、

「応仁」

と触れ出された。このことは、小次郎も知っている。「仁ハ之物ニ感ジ、物ハ之仁ニ応ズ」という中国の古典の文章からとったという。「上の仁に、しもじもが応える」という期待がこめられているというのだが、なにやら若い小次郎ですらそらぞらしい。

小次郎は尾根まで登りきると、畑を見まわした。かれ自身が樹林を切りひらいて造った畑で、兄の田畑からここだけは独立しており、天にも地にも替えがたいものだった。

田原荘は、盆地というより袋の中である。

袋のなかにも、さらに大小の袋が入っている。細流を見つけてはひとびとが分け入り、田をひらき、集落という小袋をつくった。

山中家の祖は、鍬一つで新田をつくり、他村からの襲撃にそなえて屋敷を砦のようにした。やがて分家ができるごとに山田がひらかれ、集落は二十戸になった。二十戸は一つの御宮を中心に結束し、その宮にあつまっては、集落のとりきめをした。

上に対しても、

「私どもは藤原氏の末の末でございます」

と言い、いつほどか、平安朝の初期、藤原氏の末流で坂東で活躍した藤原秀郷（俵藤太）の有縁の者の子孫ということになって、二十戸がすべて藤原氏の定紋である下り藤をつけるようになった。

平安時代、田原荘は藤原氏の荘園だったため、農民たちにとって藤原氏を称することは、諸事

都合がよかったにちがいない。

武家の世になり、それも、鎌倉の世が潰え、室町の世になった。室町の世のはじめは日本国の武士・農民が南北にわかれて争ったが、そのときはこの郷は南朝に所属して、ひとびとは諸方の合戦にかり出された。南朝についたのは、真言宗の寺々の多くが南朝派だったからである。この郷には、真言宗の寺が多かった。

それはさておき、山中家とその集落は、外界のことについては、

「すべて大道寺殿を頼み参らせる」

としている。

大道寺殿とは、この盆地のなかでも、やや大きい袋の谷に水田を持つ勢力で、影響下の戸数も多い。百姓の規模としては、江戸期の大百姓か、小庄屋程度のものかと思える。

大道寺家の代々の当主は、京へ出ては権門に出入りし、政情にあかるく、京での伝手も多い。このために、田原郷の一部では大道寺家を「触頭」としてあがめ、わが家、わが村を立ちゆくように頼りつづけている。小次郎の山中家もそうであり、大道寺の「触下」になっていた。

「若厄介に用がある」

と、昨日、大道寺家から使いがきた。

「京まで人を送ってもらいたい。ついては五、六日の乾飯を持ち、わが屋敷まで来よ」

ということだったので、小次郎は早朝に尾根の畑までのぼり、手みやげの野菜などを用意しようとしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com